卒業論文の要旨

論文題目	異文化への適応と価値観の形成～1930-1940 年代 満州滞在者の語りから～
氏名	岩本 夏鈴
メジャー	文化人類学

（要旨）

近年、戦争体験世代の高齢化が進み、戦争体験をどのようにして後世に引き継ぐかが火急の課題とされている。特に満州引き揚げ者とのコンタクトは非常に困難になっている。本研究は、満州引き揚げ者の体験を記録するとともに、第二次世界大戦前後に満州に居住していた日本人が、満州での経験によって、価値観やアイデンティティの形成にどのような影響を受けたのかを明らかにすることを目指した。第二次世界大戦が終戦を迎えた 1945 年まで、5 年以上満州に滞在していた日本人女性 2 名に半構造化面接を行った。それぞれの語りをシンボリック相互作用論(Mead, 1934; Blumer, 1969)の認識論に基づいた、シャーマズ（Charmaz, 2006)の社会構成主義版のグラウンデッド・セオリー法(Constructivist Grounded Theory Approach)を用いて分析し、焦点化コードを抽出した。コードは「食」「人との交流」「文化」「学校」「戦争」「家族」の 6 つのカテゴリーに分類された。中でも「食」「文化」「人との交流」において、各所に中国文化やロシア文化といった異文化からの影響がみられた。「食」の分野では異文化からの影響を受けた嗜好の特徴がみられた。両者は幼少期に満州に滞在していたことで、日本文化、中国文化、ロシア文化の融合を経験した。これにより、満州滞在者が自文化とするものは、さまざまな文化が混じり合った複合的な文化である。「戦争」「家族」では、第二次世界大戦中の苦労に加え、終戦後の満州での厳しい暮らしや引き揚げ体験が語られた。過酷な状況で経験した現地の人々の優しさや家族との団結は、満州滞在者の記憶に深く残るものだった。満州で経験した文化や人との交流、家族との関わり方は満州滞在者の価値観形成に強く影響をあたえている。

（指導教員の推薦のコメント）

終戦後の満州からの引揚者への半構造化面接で得られた語りをもとに、引揚者が幼少期にどのような経験をし、それが本人の現在の価値観にどのような影響を与えているかを、詳細に検討している。高齢者となった引揚者の体験そのものがライフストーリーとして貴重であるが、とくに満州での中国、ロシア、また日本など複合的な文化の体験、引揚の苦労が、その後の人生の対人関係や家族の価値観に影響を与えていることを、グラウンデッドセオリアプローチにより丁寧に分析している点は非常にユニークである。